

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

芥川龍之介「或日の大石内蔵之助」論 <正直であること>

著者	上野 万季
雑誌名	日本文学文化
号	13
ページ	76-92
発行年	2014-02-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00006402/

芥川龍之介「或日の大石内蔵之助」論

—〈正直であること〉—

上野 万季

はじめに

芥川龍之介の「或日の大石内蔵之助」(『中央公論』大正六年九月)は、赤穂浪士の吉良邸討入事件のあとの、大石内蔵之助とその同志らの姿を描いた短篇である。本稿では、この作品について研究史上誤解があること、そしてそれがどのように生じたのかを明らかにさせながら、龍之介が「或日の大石内蔵之助」に込めた思いを読み解いていく。

論を進めるにあたり、まずは「或日の大石内蔵之助」の典拠と呼ぶことのできる記録類を、龍之介がどのように扱ったのかを確認する。

細川家の家臣・堀内伝右衛門による『堀内傳右衛門覚書』、明治四十二年の福本日南『元禄快拳録』、大正三年の同『元禄快拳真相録』が主な典拠とされている。これらに収められた記録が、作品にどのように生かされたかに関しては、既に

石割透氏による研究¹⁾、奥野久美子氏による詳細な比較²⁾がある。今回は論を進めるにあたって、龍之介が直接参考にした箇所が多く見受けられる『元禄快拳録』(上篇)から、龍之介の描いた内蔵之助像の核となったと考えられる箇所を挙げる。

内蔵助は天稟人に優れたる上に、學門武藝^{ガク}も亦衆に超え、一等の士太夫たる資格に於て一つも缺^{ヘマ}げた所が無い。所謂文武兼備の士であつた。併ながら平生極めて謙遜にして、少しも其能に誇らうともせねば、又其能を見はさうともせぬ。それかといつて曲々たる郷愿流^{きやうげんりゅう}の態度を持するのでも無い。酒も善く飲めば、時には洒脱な遊もする。(三十五 全)

このように、英雄としての内蔵之助と、謙虚で、時には酒も遊びもたのしむ内蔵之助と、両面の姿が記されている。こ

の記述は、作品に生かされていると言える。しかし、ただそのまま書き写したのではない。傍線を施した「一つも缺けた所が無い」という日南の記録を疑い、これを利用しながら、龍之介なりに膨らませている。また、『快筆録』（上篇）の次の箇所も、作中の内蔵之助像の形成に大きな影響を与えたと考えられる。討入までの間、一度は神文しんもんにその名を連ねた同志らの中から、徐々にその列から離れようとする者が出始めた。そのときの内蔵之助の様子である。

『（前略）好し／＼此際一列一帯に神文を返し遣らば、有らゆる沙磧を洶げ棄て、純金の分子のみを取止めよう。斯くする時は臆病連の面皮も立ち、後害を遺す患も無い』と、彼が平生の自由主義は亦此間にまで發動した。（八十六 連盟の淘汰）

「臆病」で士気の低い者が党にいては、手落ちが発生したり、最悪の場合は計画を果たすことができなかつたりするだろう。しかし、そうして「沙磧を洶げ棄て」ようとする中でも「臆病連の面皮」の立つことに心を遣う内蔵之助の姿が伝えられている。福本日南自身は自らの記述の典拠を明確に示していないため、この記録の裏付けとなるものはわかっていないが、龍之介がこの記述をもとに、自らの作品の主人公・

大石内蔵之助を形作ったことがわかる。

以上を踏まえて、作品の読解を行っていくこととする。

一、〈沈黙〉の推移

「或日の大石内蔵之助」は、内蔵之助の孤独を描いた作品である。それも、共に主君の無念を晴らし、心のつながりを信じていた仲間らと、実際には同じ思いを抱いてはいなかったと知る、突き放されたような孤独である。まずは、内蔵之助がこの孤独に気づいていく過程を追うことにする。注目するのは、内蔵之助の〈沈黙〉の態度と「火鉢」である。

内蔵之助は、ふと眼を三国志からはなして、遠い所を見るやうな眼をしながら、静に手を傍の火鉢の上にかざした。（中略）その火気を感じると、内蔵之助の心には、安らかな満足の情が、今更のやうにあふれて来た。

これは、作品の三段落目にあたる箇所である。一段落目と二段落目は、内蔵之助をはじめとする「元浅野内匠頭家来、当時細川家に御預り中」であった「同志」たちの、「或は書見に耽つたり、或は消息を認めたりしてゐる」様子、つまり外から見た様子を描いている。三段落目に至ってはじめて、「内蔵之助の心」が描かれることになる。「安らかな満足の

情」は「火鉢」からのぼる「火氣」の「暖さ」によって搔き立てられるものであるということが、この箇所の描写からわかる。この「暖さ」を感じながら、内蔵之助は同志と「満足さうに、眼で笑ひ合つた」。このとき内蔵之助が感じていた「満足の情」の内容は、本文にあるとおり、「事業を完成した満足」と「道徳を体現した満足」である。「しかも、その満足は、復讐の目的から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない」と断言できるほどであった。また、「眼で笑ひ合つた」というのは、「沈黙」していても、互いが同じ思いを共有している、文字通りの「同志」であることを、少なくともこの時点では内蔵之助は信じて疑っていなかったということを表している。続けて、内蔵之助の様子を見ていく。

「満足の情」を味わっている内蔵之助のもとに、下の間に行っていた同志の一人、早見藤左衛門が帰ってくる。藤左衛門は、その動作ひとつひとつがスローモーションのように描かれるという不吉な登場をする。藤左衛門の登場によって、内蔵之助の「満足の情」、「快い春の日の暖さ」に変化がもたらされることが暗示されているのである。このとき藤左衛門が持ち込んできたのは、内蔵之助らが「吉良殿を討取つて以来、江戸中に何かと仇討じみた事が流行るさう」だという噂話である。藤左衛門をはじめとする同志たちは、それが自身

らの「真似」であることが「何故か非常に得意らし」く、「顔を見合せて、笑つ」ている。その中で「唯一人内蔵之助だけは、僅に額へ手を加へた儘、つまらなさうな顔をして、黙つてゐる、——藤左衛門の話は、彼の心の満足に、かすかながら妙な曇りを落させ」ていた。「江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが当然である」が、「それにも関わらず、彼の心からは、今までの春の温もりが、幾分か減却したやうな感じがあつた」とする。この描写で、内蔵之助のもつ同志との連帯感と「温もり」とが連動していることが明らかになっている。内蔵之助の信じていた同志との連帯は、徐々に疑わしいものとなっていくのである。

なぜ内蔵之助がこの話題に「笑はなかつた」のかと言えば、自身の「道徳上の要求と、殆完全に一致するやうな」復讐が、「乱暴至極」に「真似」をされたためであると考えられる。確かに内蔵之助のしたことは、主君の仇である吉良上野介義央を討取ることであり、米屋の主人を散々撲つた紺屋の職人に、米屋の丁稚が奇襲を仕掛けたことと同じではあるのかもしれない。しかし、主人、仲間、家族、暮らし等、内蔵之助が賭したものはあまりにも多い。それでも自身の本願を叶えるため、全てを受け入れた。そして今、公儀の沙汰を受けようとする身となっている。それが、「真似事がして見

たくなる」という理由から、形だけの「真似」をされた。内蔵之助には不快であるこの現象が、同志らには面白く、誇らしくさえあるらしい。ここで龍之介は、内蔵之助に対するひとつの考察を織り込んでゐる。

これは恐らく、彼の満足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行為とその結果のすべてとを肯定する程、虫の好い性質を帯びてゐたからであらう。勿論当時の彼の心には、かう云ふ解剖的な考へは、少しもはいつて来なかつた。彼は唯、春風の底に一脈の氷冷の氣を感じて、何となく不愉快になつただけである。

内蔵之助が感じた「不愉快」さに関して、はつきりとした批評が述べられている。従来、この箇所を作品読解の軸として、内蔵之助に対する批判が行われてきた。この問題に関しては後述するが、内蔵之助が「虫の好い性質を帯びてゐた」人物であるという批評を唯一の軸としてしまうと、龍之介が作品に込めた意味合いの一方を見落とすことになるのである。続けて内蔵之助の心と「暖さ」とを確認していくことで、見落とされがちなもう一方をとらえることとする。

内蔵之助のもとに持ち込まれた二つ目の事件は、先の仇討

流行の件に対して、内蔵之助が話の流れを変えようとしたことから始まった。藤左衛門に招かれて座敷にやつてきた、細川家の家来・堀内伝右衛門は、「素朴で真率な性格」によつて、既に内蔵之助らとの信頼関係を築いていた。伝右衛門は、内蔵之助らの「忠義に感じ」た江戸の民たちが「仇討の真似事」をしていることを、「じだらくな上下の風俗が、改まる」契機になるとして、内蔵之助を持ち上げる。内蔵之助はここで、自身の親族を含め、今回の仇討には多くの「背盟の徒」がいたことを語る。これを語る内蔵之助の真意は「我々と彼等との差は、存外大きなものではない」ということであり、この深い思慮に基いて、「変心した故朋輩」のことに言及したのである。

彼としては、実際彼等の変心を遺憾とも不快とも思つてゐた。が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐れみこそすれ、憎いとは思つてゐない。人情の向背も、世故の転変も、つぶさに味つて来た彼の眼から見れば、彼等の変心の多くは、自然すぎる程自然であつた。もし真率と云ふ語が許されるとすれば、氣の毒な位真率であつた。

内蔵之助と同志との会話のなかで、「近松が甚三郎の話をした」というエピソードが語られたことがほのめかされる箇

所がある。これは、近松行重の家来・甚三郎が、討入を果たして吉良邸から出てきた近松らを、蜜柑や餅の差し入れをしてねぎらったという話である。甚三郎は討入への参加を志願したが、内蔵之助は浅野内匠頭の直接の家臣でない者の参加を許さなかった。「江戸中で仇討の真似事が流行」ついているという噂話の中で「米屋の丁稚が（中略）暮方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤を向うの肩へ打ちこんだ」と聞いたときには「それはまた乱暴至極ですな」と感想が漏らされる。それが「仇討」であるという前提のもと語られてはいても、「いきなり鉤を向うの肩へ打ちこ」むことは「乱暴至極」であるという認識がここに生まれていたことがわかる。これが内蔵之助と忠左衛門と、どちらの発言であるかは明記されていないが、この後噂話を持ち込んだ「藤左衛門と忠左衛門とは、顔を見合せて、笑つ」ており、内蔵之助は「黙つてい」た。先に確認したとおり、内蔵之助は自身のすべてを賭して果たした仇討を、形だけ「真似」されたことに「不愉快」さを感じた。吉良邸への討入は、主君の事件以降、浅野家を守ろうとあらゆる手を尽くした内蔵之助が「乱暴至極」であると承知した上で下した決断だった。また、作中には語られないが、内蔵之助は討入の際、こちらに襲いかかってくる者のみを斬り、逃げていく者は追わずにそのままにするようにと同志らに指示をしていたという。⁵ こうした内

蔵之助の姿勢からは、たとえ忠義のためでも、その過程で安易に自らの命を捨てたり、他者を傷つけたり命を奪ったりといった行為をしようとはしない明確な意思というものが窺える。したがって、「背盟の徒」たちが、自身の家を守る、命を惜しむなど、どのような理由で仇討の列から外れようとも、それは「自然すぎる程自然で」「気の毒な位真率」な行為であった。それを「罵殺」しようなどとは思わなかったのである。そもそも、内蔵之助の細川邸における自らの生への認識は、初めの吉田忠左衛門との会話に示されている。

「かう云ふのどかな日々を送ることがあらうとは、お互いに思ひがけなかつた事ですからな。」

「さやうでございます。手前も二度と、春に逢はうなどとは、夢にも存じませんでした。」

「我々は、よく／＼運のよいものと見えますな。」

自身が生きているのは「運のよい」だけのことと、討入は死を覚悟してのものであった。たまたま生き残ったから、ここでこのように談笑していられるのである。内蔵之助も、「一党の客気を控制」するとう公的な骨折りと、妻子に辛い思いをさせるといふ私事の心労などを経てきた。そのような内蔵之助であればこそ、板挟みになった者の気持ちは「自

然すぎる程自然」で、「氣の毒な位真率であつた」と理解を示すことができた。家臣としての、武士としての氣概だけではどうにもならない心中があるということがよくわかつていた。「彼らに与ふ可きものは、唯だ憫笑が残つてゐるだけ」というのは、同じ岐路に立ち、違う道を選んだ者同士の、無念の思いと苦笑いのみが残ることではないか。こうした思いを共有できない同志たちの「興奮」に、「唯一人、大石内蔵之助だけは、両手を膝の上に載せた儘、愈つまらなさうな顔をして、だんだん口数をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めてゐる」となる。内蔵之助をあたたためていたはずの満足が実は、同志と真に共有できていなかったという事実が明らかになってくるに従つて、戸惑いの視線を向けることになるのである。

ここまで、内蔵之助は「眼で笑ひ合つた」り、「つまらなさうな顔をして、黙つてゐ」たり、「だんだん口数をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めてゐ」たりと、《沈黙》の態度を見せていく。「彼の無言であるのを見た伝右衛門は、大方それを彼らしい謙虚な心もちの結果とでも、推測したのであらう」、続いて内蔵之助の「佯狂」ぶりを褒め称える。それさえも内蔵之助は「殆侮蔑されたやうな心もちで苦々しく聞いており」、「復讐の拳を全然忘却した駑蕩たる瞬間を味つた事」を、「思ひ出すともなく思ひ出す」。

彼は己を欺いて、この事実を否定するには、余りに正直な人間であつた。勿論この事実が不道德なものだなどと云ふことも、人間性に明な彼にとつて、夢想さへ出来ない所である。従つて、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽す手段として激賞されるのは、不快であると共に、うしろめたい。

ここには、内蔵之助の人間性に関する重要な表現がなされている。それは、内蔵之助が「余りに正直な人間」であるということである。自己に「正直」であつたがために、忠義のために骨を折つたことも、放埒の生活に我を忘れてたのしんだことも、どちらも、自身が心から望んだことであるということを否定できず、また、否定する気もなかったのである。先の「背盟の徒」と自身との「差は、存外大きなものではない」とした内蔵之助は、ここでも、どちらか一方を善きものとして、もう一方を忌み嫌い、捨て去るといった姿勢を取らなかつた。それにもかかわらず同志や伝右衛門らは「内蔵之助の忠義に対する盛な歎賞の辞をならべ」、内蔵之助の浮べる「苦い顔」を理解しようともせず、英雄・大石内蔵之助を祭り上げることとなる。

こうして内蔵之助の心の中に「僅に残つてゐた胸間の春風

が、見る／＼中に吹きつくしてしま」い、「一切の誤解に対する反感と、その誤解を予想しなかつた彼自身の愚に対する反感が、うすら寒く影をひろげ」ていく。その中で、「暖さ」を求めて火鉢に手をかざしてみても、「火の気のうすくなつた火鉢」に、既に「暖さ」はなくなつてしまつてゐる。

翻つて、作品冒頭では「春の浅い座敷の中は、肌寒いばかりにもの静」でも、「睡氣がさしさうでな」らないほどに「暖さ」が感じられていた。それが、最後には「座敷の中は」「面白さうな話さ」でにぎやかでありながらも、内蔵之助は「暖さ」を少しも感じるこゝろでなくなつてゐる。内蔵之助の〈沈黙〉は「満足」から「苦々し」いものへと変わり、「同志」だと信じていた者たちとわかり合えない孤独感、「牙返る心の底へしみ透つて来る寂しさ」「云ひやうのない寂しさ」を感じていく。

この「云ひやうのない寂しさ」を象徴するのが、「青空に象嵌をしたやうな、堅く冷たい花」である。象嵌は、周囲と一体に見えながら、模様部分は色や材質が異なる。同志と自身とがわかり合えていなかったことに気づかされた内蔵之助は、象嵌のような立ち位置におり、ついに、底抜けの「冷た」さを感じる。

龍之介は「内蔵之助」発表の四か月前、大正六年五月に出版した処女短篇集『羅生門』（阿蘭陀書房）扉次丁に、禅語

「君看雙眼色／不語似無愁」を記した。「無言でゐ」た内蔵之助の心を、同志の誰も汲み取れず、「無言である」理由を尋ねようともしない。つまり「雙眼色」を「看」なかつた。内蔵之助に、「彼の満足が暗々の裡に論理と背馳して、彼の行為とその結果のすべてとを肯定する程、虫の好い性質を帯びてゐた」ことを看取した龍之介であつたが、同時に、内蔵之助の感じた強い孤独感、「云ひやうのない寂しさ」をも見出した。これを見出した眼こそが、龍之介の「雙眼」である。この「云ひやうのない寂しさ」を見出したのも龍之介であることを理解して初めて、龍之介が作品に込めたものを読み取つたことになるだろう。しかしながら先に述べたとおり、「或日の大石内蔵之助」は、「虫の好い性質を帯びてゐた」という内蔵之助批判の一文に端を発し、龍之介が「雙眼」で見つめたものを、見落としたまま論じられてきた。

二、「内蔵之助」への評価

前章では、龍之介が内蔵之助に「虫の好」さと孤独感との両方を見出していたことを確認した。「人間性に明な彼」であるから、「変心した故朋輩」も、自身が「復讐の拳を全然忘却した駭蕩たる瞬間を、味つた」事実も、否定しなかつた。

「内蔵之助」の同時代評は概ね好意的であつた。森田草平

は「別段變つた解釋も新奇な發見も加へられてはないが、周到な用意の下に、この上引張れば大石が太石でなく成る所まで持つて行かれてゐる」と評した。江口渙は「作者の心が次第に描かんとするもの、中へ入つて行つて、(中略)眞實に

人間的な大石内蔵之助の心を——アイドルでない生きた大石内蔵之助の心を、内側から押出すやうに描き出した」と評するなど、内蔵之助という人物を描き出す力量への評価が高かつた。しかし、一九六〇年代から現在までの研究の主流は、一般論的な人生訓に流れ、作品を精確に読解しきれていないように見受けられる。その結果、主人公・大石内蔵之助への理解は、「人間性に明」ではなく、未熟で幼い人間性を持ち主であるという方向に傾いてしまつた。ここで改めて、作品本文に則し、前章で行つた読解をふまえながら、先行研究の妥当性を検討したい。

まず、一九六二年四月に發表された三好行雄氏の論を検討する。(以下、傍線引用者)

内蔵助をとらえる〈云ひやうのない寂しさ〉は、障子のなかの〈面白さうな話声〉から疎外された人間の孤独であると同時に、かれがそこからはみださな⁶いたために、は、相対的關係に耐え、〈誤解〉に耐えねばならぬことを悟つた人間の淋しさでもある。誤解と錯覚によつてし

か、連鎖をたしかめえない人間の淋しさである。

「そこからはみださな⁶いたために」という箇所は、再検討されるべきである。内蔵之助は、「そこからはみださな⁶いたために」という行動は取つていない。内蔵之助は、不快な流行に「笑はなかつた」り、多くの「背盟の徒」を出したことを、自身を含めて恥じたり、「乱臣賊子を罵殺しにかゝる同志たちを前に「無言でゐ」たりと、自身と同志との考え方の違いに戸惑ひ、自身の考えを伝えようとしていた。それでも同志とわかり合えない内蔵之助は、「廁へ行くのにかこつて、座をはづし」た。もしも同志たちの間から「はみだ」したくないのならば、「座をはづ」さずに、愛想笑いでも浮べていればよかつたはずである。「座をはづし」た内蔵之助は、「面白さうな話声」から疎外された、そのことが「寂し」かつたのではない。同じ志を持つものと信じていた仲間と、実はわかり合えていなかった、そして何を言つてもわかり合えないということが「寂し」かつたのである。

続いて検討したいのは、一九七七年五月、浅野洋氏の、「自らの認識者の風貌が、他ならぬ〈障子の中〉という設定でのみ可能であることに依然として気付かない」という論である。内蔵之助は同志たちとともに〈障子の中〉にいるが、その〈障子の中〉でさえも、同じ思いを共有することができ

ず、温度差を感じている。この点から、障子の中と外という区切りを用いることは有効ではないことがわかる。

また、浅野氏は、内蔵之助が「変心した故朋輩の代価で、彼等の忠義が益喪めそやされてゐると云ふ、新しい事実を發見した」ことについて、次のように論じている。

内蔵之助はこの《新しい事実》の前に驚いた様子をみせるけれども、《人情の向背も、世故の転変も、つぶさに味つて来た彼の眼から見れば》、これ位の《現実》のカラクリは、とうに見抜けていてもよい筈だったのではないか。例えば、以下のように心の中で呟く内蔵助の《内なる声》は、確かに真率ではあるが、一方では、《現実》の《人情》や《世故》に全く不明だった彼の稚氣をも暴露する声だったといえるのではないか。

何故我々を忠義の士とする為には、彼等を人畜生としなければならぬのであらう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。

内蔵助はおつとりと構えているけれども、《現実》の生活において《我々と彼等との差》が存外小さいのは、相互が《他者》を《人畜生》に見做して生き続けるからではないのか。

内蔵之助らを「忠義の士とする為には」、「背盟の徒」を「人畜生としなければならない」というこのことは、果たして本当に「《現実》のカラクリ」なのであらうか。「彼等を人畜生をしな」くても、内蔵之助がそれを望むかどうかはおいても、「忠義の士とする」ことはことはできる。つまり、「彼等を人畜生と」するのは、《現実》を動かす唯一絶対の「カラクリ」ではない。よつてこれを「新しい事実」として「驚いた」としても、内蔵之助の「稚氣をも暴露」したと言うことはできない。浅野氏はこの論を、「羅生門」の下人と老婆との倫理の闘いによせて展開している。しかし前章で見えてきたように、内蔵之助は「背盟の徒」を《人畜生》に見做して「はいない。ただ「同盟を脱した」だけであり、それぞれにとつて大切だと思ふものを、やむを得ず秤にかけ、より重い方を守った者同士であると考えていた。「人情の向背も、世故の転変も、つぶさに味つて来た」という記述は、長をまとめる長としての内蔵之助に与えられたものであり、「不明」な者には与え得ない言葉なのである。勝倉壽一氏は、一九八〇年一二月、内蔵之助の「寛容」と「憫笑」に、「優越者の倨傲の別表現」を見出すが、これにも浅野氏の論へと同様のことが言えるだろう。

勝倉氏はさらに、内蔵之助が「内省」と「自己改革」とをできなかったことを指摘する。

現実の侵襲に晒された大石の不快感・侮辱感・反感は、内省の契機となつて、そのまま現実への抵抗のエネルギーや自己存立の論理の構築へと昇華することなく、(中略)そこに描かれるのは、自己改革の方途も見せず、あくまで現実に対して情感的反応しか示し得ずに、「現実」からも、仲間からも疎外された人間の孤独な姿だけである。

しかし、ここで思い出さなければならないのは、前章でも指摘したが、内蔵之助が「仇討の真似事」という不快な流行や「変心した故朋輩の代価で、彼等の忠義が益褒めそやされてゐると云ふ、新しい事実」に対して、「苦い顔をし」て「無言であ」たまたま、その話に加わらないといった「現実への抵抗」を試み続けたことである。その「抵抗」も、内蔵之助の「雙眼」に浮かぶ「心」を理解できない同志たちに「誤解」を受け、まったく功を奏さなかったのである。

「自己改革」は、勝倉氏以外にも、一九八六年三月、石割透氏によつて、言葉を変えて言及されているように見受けられる。

大石より、他の浪士の方が、遙かに現実のありようを

はつきりと悟つていたのであり、こうした大石は(障子)の外にはじき出される。

このように、この場に至つて始めて現実を知つた大石に待っているのは、言葉によつて他の仲間との差異を確認し、自己を告白する営みであつたのかもしれない。しかし、大石はただ(沈黙)を守り続ける。

「自己改革」とは、自身が目指すものに遅れていたり劣つていたりする場合に、目指す位置まで自身を持つていくために行うものである。これを内蔵之助に当てはめると、「大石より、他の浪士の方が、遙かに現実のありようをはつきりと悟つて」いるため、内蔵之助は「現実」を「悟つてい」る同志たちに追いつかなければならないということになる。しかし、浅野氏の論を検討した際にも述べたことの繰り返しになるが、同志たちの行為は、唯一絶対の・至高の行為ではない。同志たちは、石割氏の指摘するように、「二項対立という関係の網にからまれないでは生き得ない個人の存在のありよう」を体現していた。しかし、同志らはそれを無自覚に行つていたのである。こうした同志らについて、「大石より、他の浪士の方が、遙かに現実のありようをはつきりと悟つていた」と言うことはできない。

勝倉氏の論に戻ると、氏は「本篇は、自己の存在の場を情

感的にしか把握し得ない大石の形象を通して、その論理的基盤の薄弱さを見詰めた作品」とする。ここで勝倉氏の述べる「論理」とは、「自己満足の内実たる具体的」な「彼独自の確固たる道德観なり人生認識」のことである。これが「読者の前に提示され」ておらず、「そこに彼の道德観と世間一般の封建倫理との論理的齟齬も、道德観の対立の苦悩も認めることはできない」とする。

彼はただ「遠慮なく」侵入してくる「現実」に「満足」を蚕食されて、「今までの春の温もりが、幾分か減却したやうな感じ」と、「春風の底に一脈の冰冷の氣を感じ」るといふ感覺的充足が損なわれたにすぎない。やがて「僅に残つてゐた胸間の春風が、見る／＼中に吹きつくしてしまつた事を意識し」て幻滅と寂寥を感じても、社会の讚美する封建道德の体現者としての彼の存在の場は、客觀的には毫も揺らいではないのである。

彼等が「忠義」を成し遂げられたのは、(家来は主君を助けるものである)という「論理」に、自身の主君への忠誠や誇りといったやうな、明快な「論理」では説明のつかない「情感」があつたからではないか。討入を果たした四十七士という「存在の場」における「情感」は「論理」と同等に重

視されるべきものであり、「感覺的充足が」「現実」の異名をとつた同志たちによつて「損われた」ことは、内蔵之助にとつての「論理的基盤」を引き剥がすことに等しい、一大事と呼べるのである。内蔵之助は決して、「社会の讚美する封建道德の体現者としての彼の存在の場」が「客觀的には毫も揺らいではない」ことに甘えてはいなかつた。「存在の場」をなんとか自身の「正直」な面を反映させたものにしようとしていた。「毫も揺ら」がせようとしなかつたのは、同志たちである。英雄としての内蔵之助、英雄としての自身らの姿しか見ることでできない同志たちのありかたは、真理を見出す「悟」りからは程遠い。内蔵之助は、そのような同志たちからは遅れてもおらず、劣つてもいない。「人間性に明」で、ものごとを多角的に見る眼を持つた内蔵之助は、同志たちの一面的なものの見方に、閉口せざるを得なかつたのである。二〇〇七年一月の関口安義氏による「放埒を尽くす方が、はるかに自分らしかつたのではないか」という論にも、どちらの「方が」といったやうな「二項対立」ではなく、どちらも「自分らし」として受け入れていたのが内蔵之助であると答えることができるだろう。

以上、見てきたやうに、「或日の大石内蔵之助」の主人公・大石内蔵之助は、「不明」で「現実」を知らない幼稚な

人物であると読み解かれてきた。この誤解の原因として考えられるのは、研究に携わる者が既に持っている、考え方の癖や人生訓、自明のこととして用いてきた、ものごとに対する概念である。多数派のほうが正しい、上に立つ者は下に置いた者を侮るという図式、そして、内蔵之助が同志らに見出している特徴でもある、自身はいつでも善玉であるという自信がそれにあたる。作者が作品に込めた思いを読み解くためには、作者自身がものごとをどのように捉え、どのような思いを抱きながら生きていたのかを、まずは精確に読み取ることが不可欠である。最後に、龍之介が「或日の大石内蔵之助」で扱ったテーマについてどのように考えていたのかを見ていきたい。そのテーマとは、「正直であること」である。

三、「余りに正直な人間」

龍之介が、歴史家の友人・渡辺庫輔に宛てた大正十一年一月九日の書簡には、「内蔵之助」のおよそ二か月後、大正十一年一〇月二〇日より大阪毎日新聞に連載した「戯作三昧」について、「僕の馬琴は唯僕の心もちを描かむ為に馬琴を仮りたものと思はれたし」と記している。「内蔵之助」が発表された九月末、後に龍之介の妻となる塚本文に宛てた書簡には次のように記す。

大抵の事は文ちゃんのすなはさと正直さで立派に治ります。それは僕が保証します。世の中の事が万事利巧だけでうまく行くと思ふと大まちがひですよ、それより人間です。ほんとうに人間らしい正直な人間です。それが一番強いのです。

「正直であること」が「一番強い」というのは、信念であり願望でもあった。以上のことを鑑みると、龍之介は内蔵之助にも、自身の「心もちを描かむ」としたと考えることができるだろう。「正直であること」を同志の誰ともわかり合えずに死にゆく内蔵之助の姿を、龍之介は自身に重ねていたのではないか。

龍之介は、一高生だった明治四十四年（推定）、山本喜誓司宛書簡で、次のような感覚を吐露している。

僕も自己が二つあるやうな気がしてならない。さうして一つの自己はもう一つの自己を、絶えず冷笑し侮辱してゐる（中略）僕は自ら聡明だと信ずる、唯其聡明は呪ふべき聡明である。僕は聡明を求めて却って聡明のために苦んでゐるのだ、其相搏つてゐる大きな二つの力の何れか、無くつてくれ、ばい。さうしなければいつも不安である、かうまで思弱るほど意気地のない人間なんだ

もの。

これを内蔵之助に重ねてみると、内蔵之助は複数の自身のあり方を見つめることのできる「聡明」な人物で、自己を見つめる「もう一つの自己」に目隠しをして、自身をごまかすことのできない人物であった。一方、同志たちは、「相搏つてゐる大きな二つの力の何れかゝ無く」なり、自身や他者の行いに絶対的な判断を下すことに、何のためらいもない状態であった。

また、文へ宛てては、大正五年（推定）、次のようなことをも書き送っている。

虚名をあてにしてはいけません自分のほんとうの価値をあてにするのです自分の人格をたのみにするのです**ほん正直な心**を持った人間は浅野総一郎や大倉喜八郎より神様の眼から見てどの位尊いかわかりませんお互いに苦しい目や楽しい目にあひながら出来るだけさう云ふ尊い人間になる事をつとめませうさうして力になりあひませう

「相搏つてゐる大きな二つの力の何れかゝ無くつてくれ、ばい、」と「思弱」りながらも、「尊い人間」でありたいと

願う龍之介の自尊心と呻吟とを、ここに見ることが出来る。では、この〈正直であること〉に対する思いはどこから来たのか。その思いの根源は複雑なものであり、別稿を起こす必要がある。しかし今回は、その要素の一つとして、「或日の大石内蔵之助」執筆のおよそ九か月前に亡くなった龍之介の恩師・夏目漱石とのかかわりを見てみる。

龍之介が塚本文に宛てた書簡の〈正直であること〉に関する一文は、漱石の言葉を継承したものと言うことができる。漱石は明治三十八年一月から「ホト、ギス」で連載された「吾輩は猫である」の第九章において、手鏡で自身の痘痕面を見つめ、「成程きたない顔だ」と漏らす珍野苦沙弥を描いた。漱石が猫に言わせたのは、「凡て人間の研究と云ふものは自己を研究するのである」ということである。そして、「鏡は己惚れの醸造器である如く、同時に自慢の消毒器である」とする。「内蔵之助」において、同志らは「自己を研究する」眼を持たず、自身らの「真似」をした世間を「面白く眺めた。そして自身らを英雄の一人と数えて、「手ひどく、乱臣賊子を罵殺しにかゝつた」。「己惚れ」を「醸造」しなから、「自慢」を「消毒」できなかったたのである。

漱石は同じ場面で、次のようにも記す。

自分で自分の馬鹿を承知して居る程尊とく見える事は

ない。此自覺性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋が悉く頭を下げて恐れ入らねばならぬ。

確認してきたように、内蔵之助は自身の「虫の好い性質」を「解剖的な考へ」をもつて見抜くことはできなかったが、身内の失態を自身のこととして恥じ、「復讐の拳を全然忘却した駭蕩たる瞬間を、味つた事」を、「己を欺いて、この事実を否定する」ことをしなかった。内蔵之助は「彼自身の愚」を誤魔化さず、凝視し、それを肯定していた。

漱石は明治三十九年四月、「坊つちやん」の第四章ではさらに直接的に、「世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考へてみる」と、卑怯な手を使う生徒と「正直」な主人公と闘わせた。

大正三年一月の講演「私の個人主義」では、漱石自身の海外留学の体験から、次のような考えを抱いたことを述べている。

いくら人に賞められたつて、元々人の仮着をして威張つてゐるのだから、内心は不安です。手もなく孔雀の羽根を身に着けて威張つてゐるやうなものですから。それでもう少し浮華を去つて摯実に就かなければ、自分の腹の中は何時迄経つたつて安心は出来ないといふ事に気がつ

き出したのです。

（中略）世界に共通な正直といふ徳義を重んずる点から見て、私は私の意見を曲げてはならないのです。

「人の仮着をし」た自身ではなく、「浮華を去つて摯実に就」いたありのままの自身の姿を見つめ、鍛え、これを発信する。この「正直」さは人間としての「徳義」であり、それを持つて初めて「安心」できる自分自身となり得るのである。そして、大正五年八月に、龍之介とその友人・久米正雄へ宛てて、「人間を押すのです。文士を押すのではありません」と、肩書きや冠を戴かない「人間」として、ただし「むやみにあせ」らず、「偉くなつて」ほしいと祈つた。「人間」としての自身を自ら押すことは、「人間」としての自身に自信がなければできないことではない。龍之介は、「正直」であることで、「尊い人間になる事」を夫人と誓ひ合つた。「もう一つの自己」に「絶えず冷笑し侮辱」されているように感じていた龍之介にとって、自身が自身を認め肯定する自尊心を養うことは、作家となる前からの悲願であつた。「正直といふ徳義を重ん」じ、「人間」として「偉くな」れと龍之介を励ました漱石を亡くして九か月、「或日の大石内蔵之助」において、義士や英雄ではなく、「人間」としての自己を見つめ、肯定した内蔵之助の姿を描いた。これは、龍之介の憧

と私の心に刻まれてしまひました

れの姿であつたが、そうした姿が理解されることはないといふことも、幼い頃からの経験によつて、わかつていた。まず龍之介が「養父母や伯母に遠慮勝ち」で、「どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へ¹⁵」るような固有の事情を抱えていたことが、〈正直であること〉に対する切望の背景にあつた。「道化人形」とは、ただ滑稽なだけでなく、自ら進んで滑稽に演じて見せる道化の姿を写し取つた人形である。物心がついたころには既に龍之介には二組の両親がおり、その間にあつて自身の意思を押し殺して、「養父母や伯母」が望むようなふるまいをして生きてきた実感があつた。そして、

大正四年一月に吉田弥生への恋心という「正直」な思いを「養父母や伯母」に打ち明けるが、しかし、「夜通しない」て反対され、その思いを手放した。同年三月九日の親友・井川恭宛書簡には「イゴイズムをはなれた愛の存在」への「疑」いが記されており、同年四月二十三日の山本喜督司宛書簡には、次のような悲痛な思いをしたためている。

如何に血族（つぐま）の閑族が稀薄なものであるか 如何にイゴイズムを離れた愛が存在しないか 如何に相互の理解が不可能であるか 如何に「真」を見る事の苦しいか さうして又如何に「真」を他人に見せしめんとする事が悲劇を齎すか——かう云ふ事は皆この短い時の間にまぎく

以上のように、複雑な家族関係のなかで育つてきたことが、ありのままの自分自身をさらけ出して生きる、「真」を他人に見せしめんとする「〈正直さ〉への切望につながつたと考えることができる。龍之介のこうした生育環境の問題については先に述べたとおり、別稿で詳しく論じることとする。龍之介の〈正直であること〉への思いを丁寧に読み取っていくことは、「内蔵之助」以外の多くの芥川作品の読解に有効なはずである。

おわりに

主君への忠義を果たすのは内蔵之助の願いであり、それは内蔵之助自身を始めとして同志たちの誰にも否定されない。しかし内蔵之助にとつての自己認識は、忠臣のみで成り立っていたわけではない。遊郭ですべてを忘れてたのしんだのも内蔵之助である。そうであるにもかかわらず、同志たちは内蔵之助の英雄としての一面しか見ておらず、その他の面を見ようとしなかった。これこそが、内蔵之助の「雙眼色」を「看」ようとせず、ついにわかり合うことのできなかつた同志たちの視点の陥穽である。これは、内蔵之助の「虫の好性質」のみに眼を向けた読解によつても陥つてしまうもので

あった。ものごとを多角的・多面的に見つめるといふ姿勢は人の間に生きる者としてのあるべき姿であるが、そのように眺めようとしないう人々がいることもまた「事実」である。「聡明」であるが故にこの点を見抜き、「云ひやうのない寂しさ」を感じた内蔵之助は、決して「不明」などではない。同志たちが「不明」であるから、内蔵之助の「愁」を「看」ることができなかったのである。

自分自身に対する「正直」さ、自身の人生への誠実さを希求する思いが人一倍あることによって、内蔵之助、そして龍之介は〈沈黙〉して、「牙返る心の底へしみ透つて来る寂しさ」の中に、佇立させられているのである。

注

引用本文は新版『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九五年）、新版『漱石全集』（岩波書店、一九九三年）を使用した。

- (1) 石割透「さまよへる猶太人」「二つの手紙」「或日の大石内蔵之助」——〈噂〉の中の主人公」（駒澤短大國文）一六（一九八六年三月）初出、『芥川』とよばれた藝術家——中期作品の世界（有精堂出版、一九九二年八月）所収
- (2) 奥野久美子「芥川龍之介」「或日の大石内蔵之助」の方法——

人物造形を中心に——」（『国語国文』二〇〇〇年八月）

- (3) 福本日南「元禄快拳録」上篇小引に、「其都度書目を悉く引出すのも繁碎であるから、一々は挙げぬ。只我説く所の孟浪杜撰で無い事だけは、聴者に豫め領承を求め置く」とある。

- (4) 「元禄快拳録」中篇百九十五段「義僕甚三郎」に、甚三郎への近松行重の発言として「實は太夫からの吩咐に、今回の一舉は故内匠頭様に御奉公いたした赤穂の藩士のみに限り、其他は如何なる縁故の者にても、一人も同行す可からずとの御嚴札である」とある。

- (5) 同下篇二百二十六段「東部隊の戦闘」に「内蔵助は透もあらず『出會ふ者は撃つて棄てよ。逃れる者は見逃して、無益の殺生し給ふな。目指すは上野介殿一人ぞ』とある。

- (6) 森田草平「新秋の創作を読む（三）」（『時事新報』大正六年九月六日）

- (7) 江口渙「九月の小説と戯曲」（『帝國文学』大正六年一〇月）
- (8) 三好行雄「或日の大石内蔵助」（『鑑賞と研究 現代日本文学講座』小説5、學燈社、一九六二年四月初出）

- (9) 浅野洋「第二短篇集『煙草と悪魔』（『国文学 解釈と教材の研究』學燈社、一九七七年五月）

- (10) 勝倉壽一「『或日の大石内蔵之助』——存在の場の認識——」（『愛媛大学教養部紀要』XIII号、一九八〇年十二月初出、『芥川龍之介の歴史小説』教育出版センター、一九八三年六月所収）

- (11) 同（2）。

- (12) 関口安義「或日の大石内蔵之助」論——「寂しさ」への問い」(『近代文学研究』日本文学協会近代部会、二〇〇七年一月)
- (13) 夏目漱石より芥川龍之介・久米正雄宛書簡(大正五年八月二四日)
- (14) 夏目漱石より芥川龍之介・久米正雄宛書簡(大正五年八月二一日)
- (15) 「或阿呆の一生」三十五 道化人形(昭和二年一〇月「改造」)

本稿の執筆にあたって、山崎甲一先生より多くのご助言を賜りました。記して御礼申し上げます。